



「祈りと平和」

「ここを一つに平和を宣べ伝えよう」

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会 常任委員会

< 目次 >

1. お知らせ

日々の祈りを通して、平和を深める集い 2

世界平和記念聖堂スケッチ等の表彰式

献堂50周年閉幕の祈りの集い

2. 聖堂建設の歴史シリーズ

献堂25周年のラッサール神父の挨拶 3

聖堂の補修工事 3

昭和58年4月に出示された司教の声明

第1次 補修工事の着工

3. ラッサール神父の思い出

シュワイツェル神父の記念講演会 5

4. 「献堂50周年を迎える祈り」

今月の祈り 8

5. 編集後記

献堂50周年を閉じるにあたり 9

献堂50周年実行委員会委員長 深堀升治

平和への願い

献堂50周年実行委員会副委員長 斉藤真仁

東西霊性の掛け橋、ラッサール師を思う 10

霊性・典礼部会 イエズス会司祭 柳田敏洋

編集後記に代えて

霊性・典礼部会 青葉憲明 (幟町教会信徒)

「行きて、福音を宣べ伝えよ。」



<写真左> 布教の実り = 向原カトリック研究会の発足
(広島市近郊の向原町に出来た初穂、この後、1954年4月に新しい聖堂が建設された。)

野間神父提供 吉田教区長秘書アルバムより
(吉田秘書は、ブラジルに帰国後、司祭になられた。)



<写真右> ラッサール神父の勇姿
(戦後、オートバイを駆って布教されたラッサール神父の情熱が伝わる懐かしい写真。)

お知らせ

「日々の祈りを通して、平和を深める集い」の開催

今年一年、私たちは世界平和記念聖堂献堂50周年を記念して「こころを一つに平和を宣べ伝えよう」というテーマのもと、各小教区を中心に一人ひとりが平和の実現のために祈り、考え、行動するなどして過ごして参りました。

この50周年記念の一年の閉幕にあたり、「祈りの集い」を下記の通り開催します。

ラッサール神父は、この平和記念聖堂をただ単に記念のためというだけではなく、世界平和が一日も早く実現するよう努力するという目的のために聖堂建設を思い立たれました。その努力の一つは、「平和を祈ること」でした。

ラッサール神父は、地下聖堂で日夜連続して聖体礼拝し、私たちが「キリストにおいて本当の平和」が発見できるよう、また、出来るだけ多くの方がキリストまで導かれるよう祈ることを願われました。平和の実現のために、「神に従い、一人ひとりが新しい人になりなさい」とラッサール神父はたびたび話されています。

日常生活で、ともすれば怠りがちな祈りについて見つめ直し、日々の祈りを通して、平和を深めるひと時を静かに持つよう心がけたいものです。世界平和記念聖堂によって、数多くの方が本当の、そして深いこころの平和を見つけ、世界平和の使徒になるよう招かれています。

とき：2004年12月18日(土)

午後2時から5時まで

ところ：世界平和記念聖堂 地下聖堂

(広島市中区鞆町4-42 鞆町カトリック教会)

プログラム：

<2:00~2:20> 聖歌、ロザリオの祈り

- 世界平和記念聖堂のステンドグラスに寄せて -

<2:20~4:30> 祈りと黙想

(指導 - イエズス会長末修練院 柳田神父)

<4:30~5:00> テゼによる祈り、聖歌

その他：祈りの集いの後に「献堂に係る記録写真」等の資料を公開します。

問い合わせ：カトリック広島司教区

献堂50周年実行委員会 霊性・典礼部会

(tel 082-221-6017)

世界平和記念聖堂スケッチおよび平和の歌の表彰式

たくさんの作品のご応募ありがとうございました。平和活動部会で審査を行い、優秀な作品について表彰を行います。応募作品が170点と多いため、受賞作品23点のみを展示させていただきます。

皆さん 受賞作品を見に来てください。

とき：2004年12月19日(日)9:30AM~

主日のミサの中で、三末司教より表彰します。

ところ：世界平和記念聖堂

行事の詳細は、平和活動部会よりご案内します。

世界平和記念聖堂献堂50周年閉幕の「祈りの集い」のご案内

世界平和記念聖堂(司教座聖堂)では、献堂50周年閉幕の「祈りの集い」を行います。

とき：2004年12月31日(金)

第1部：午後10:45~11:45

「祈りの集い」(聖体礼拝と聖体降福式)

第2部：午前0:00より新年ミサ

なお、それぞれの小教区においても、献堂50周年の閉幕にあたり「平和のための祈り」に取り組んでいただくようお願いします。

献堂ニュース「今月の祈り」の冊子を小教区に配布します。閉幕にあたり「平和の祈り」としてご活用ください。

1月1日(土)「世界平和の日」ミサ

毎年1月1日は、世界平和の日です。この日は、教皇メッセージが発表され、全世界で平和祈願ミサがささげられます。特に、来年は被爆60周年に当たります。多くの人々の参加を願います。

とき：2005年1月1日(土)午前11:00~

ところ：世界平和記念聖堂

< 聖堂建設の歴史シリーズ >

1979年6月10日に世界平和記念聖堂の献堂25周年を祝うミサが捧げられました。野口司教司式のミサで、説教台に立ったラッサール神父は、献堂当時のことを思い起こしながら、世界平和記念聖堂の献堂の意義を改めて強調し、信徒一人ひとりが平和のために祈り、平和のために尽力して働くように諭されました。

「ラッサール神父のお祝いの言葉」

世界平和記念聖堂が昭和29年8月6日山口司教様によって聖別されてから、早くも25年が経ちました。この聖堂の建立は、あらゆる困難にもかかわらず、世界中の人々の協力によって支えられ成し遂げられました。この日を迎えるに当たりすべての恩人に対して心から感謝の意を表したいと思います。とくにすでに永眠された方々が安らかに憩いますようお願いいたします。

さて、この記念聖堂建設を思い立ったのは、始めからただ単に記念のためということではなく、世界平和が一日も早く実現するように努力するという目的のためでありました。戦後、全世界に平和のために働く施設が多く建てられました。しかし、世界最初の原子爆弾によって20万人余の犠牲者を出した広島市が、原爆の使用禁止ということのみに止まらず、戦争そのものを一切止めるよう努力する使命を与えられたことを強く感じているのであります。

(中略)

戦争を避けるためには「新しい人間」が必要です。人類の誇りである科学を使いながらも、これを超越した新しい人間は、一方的な理論によって支配されている人間ではなく、霊(GEIST)によって支配されている人間です。彼こそが心において永久的な平和を保っている人間です。人類の永久の平和は、このような個人の平和から出発したものでなければ、いつまでも世界の中に戦争が続くでしょう。ですから、世界平和のための努力が成功するためには、われわれ皆がまず平和の人間にならなければならないのです。

今日、献堂25周年記念祭が行われる広島記念聖

堂によって、数多くの方が本当の、そして深い心の平和を見つけ、世界平和の礎になりますように祈って止みません。

出典：「献堂25周年を迎えて」パンフレット



(献堂25周年記念祭の様子)

聖堂の補修工事

献堂25周年は、記念聖堂の献堂の意義を見つめなおす機会になったばかりでなく、聖堂を建物として維持することにも気づかせた。鉄筋が露出している箇所、大きな亀裂・剥離した箇所などが目立ち始め、対策が必要とされていた。1981年11月から、建物全体についてコンクリートの中性化の度合を調べる調査、鉄筋の腐触の状態、コンクリートの剥離の状態などの調査が行われた。特に鐘塔上部のセメントブロックの崩落の危険性もあるという状態で、早急に補修工事が必要であるとの調査結果が示された。しかし、概算見積りで1億7千万円の経費が必要とされ、聖堂の補修工事の是非についての論議が活発に行われた。

1982年の年末に行われた教区司祭の集まりでも、聖堂補修についての説明と話し合いが行われた。司祭らの意見の大半は、この問題を単に幟町教会だけの問題としてとらえるのではなく、教区全体の問題

としてとらえるべきであるというものであった。これらの意見を踏まえて、1983年4月、野口司教は、司教座聖堂補修について始めて公式の声明を発表した。その中で信徒代表による「広島教区聖堂等修理委員会」を設置することが提案された。

昭和58年4月に出示された司教の声明

「広島教区司教座聖堂が30年来の風雨に傷めつけられ、補修を迫られています。原爆によって破壊された教会は、国内外の平和を願う人々の善意と祈りにより、司教座聖堂としてだけでなく、世界平和記念聖堂として再建されました。そして、献堂以来、平和のシンボルとして、平和を願う祈りの場となり、広島を訪れる人々にその尊さを語りかけています。その意味で、この聖堂は、単に教区の母なる教会としての存在以上に、世界平和実現を訴える貴重な存在となりました。従って、広島教区民は、被爆という悲惨な歴史の体験をこの聖堂を通して語り、キリストの平和を願う人々の代願者としての責任をもっているといっても過言ではありません。もちろん、現在の聖堂を補修しながら存続を計っても、永遠にこの姿を残すことは考えられません。しかし、広島教区司教座聖堂の歴史的責任を考えると、例え全く新しいものにする時が来ても、この責任を受け継いで行かねはならないと思います。そこで、将来の展望を持って司教座聖堂の管理推持を考えると共に、これを機会に、教区全体の諸施設についても総合的なプランを立てるようになって行けば幸いだと思えます。そのために、差し当たり、司教座聖堂補修のための委員会をつくり、今後、広島教区全体の霊的、



(塔のコンクリート煉瓦劣化部を除去した様子)

経済的助け合いの出発点となって下さるようお願いいたします。」

これを受けて、委員会では何回か会合を重ねて建物の維持管理についての将来的見通しについて検討を行ったものの、補修工事の緊急性が高まり、委員会での司教座聖堂の補修問題についての結論が出される前に、補修工事を行うことになった。



(鉄筋が錆びて剥離したコンクリートを除去した様子)

第1次 補修工事の着工

一方、委員会の議論と併行して、幟町教会信徒への資金協力が次のように呼びかけられた。

「主よ来たり給え！ 信徒の皆様には、お元気でご活躍のことと存じます。私達の教会、世界平和記念聖堂が、平和を求める世界中の人々の悲願と善意の結果として完成し、神に献げられたのは、昭和29年8月6日、第9回目の原爆記念日でした。それ以来、毎日ミサが捧げられ、原爆で犠牲になった方々の冥福と、世界平和実現のための祈りが続けられています。そして、去年は教皇様がおいで下さっただけでなく、最近では国内外からの巡礼者も増え、熱心な祈りが捧げられています。

ところが、最近コンクリートの風化が著しく、あちらこちらの傷みが目につく程になりました。先般、綿密に調査をしてもらったところ、今のうちに補修をしなければ大変な状態になることが分かりました。聖堂内と外、両方の補修費として、1億7千万円の見積もりです。

これについては、なお細部の検討をしなければならないと思いますが、外壁のコンクリートを補修するにも、最低8,000万円の費用が必要となります。

費用の捻出については、式場提供献金の積み立て、外部からの献金等で4,500万円を充当し、私たち信徒の力で、3,500万円をつくり出せたらと願っています。それには、地区例会などでも説明がありましたように、各家庭に平均10万円以上の献金をお願いしなければならないこととなります。

出費多端な折、大変ご無理なお願いとは存じますが、この献金を通じて、私たちの教会における信徒の連帯を改めて考え直すことが出来、広島宣教再開百周年一大記念行事として成功させることが出来れば、私たちの信仰の生きた証しの一つとして、神に奉献出来ると思います。皆様のご賛同とご協力を心からお願い申し上げます。」(1982年待降節の野間主任神父と幟町教会司牧委員会の手紙)

こうして、調査開始から2年後の1989年11月10日に起工式が祈りのうちに行なわれた。

工事は、翌年5月14日に事故もなく無事に完了した。総工事費は、9,500万円であった。

「今後は、1年くらい様子を見て、内部の補修を行う事と、4~5年毎にいわゆる建物の健康診断をし、その都度、必要な処置をしてゆくことが大切だと思います。村野先生には、聖堂建設の時と同じように、全く無償のお世話をいただきました。幟町教会外の多くの方々の善意の献金も多くいただきました。

原爆で犠牲になられた方々の慰霊と、世界平和実現を祈る特別の聖堂として、「ヒロシマ」に建立されたこの聖堂をその使命のために生かしながら、次の21世紀に受継いでいく事が出来ると確信します。

補修工事の着工から、ほぼ半年後の1984年5月14日(月)夕6時、聖母祭壇で、工事の無事完了を感謝して、聖体降福式が行われました。」と、野間神父は、工事の経過と感想を「平和の鐘」117号で報告されている。



(聖堂の床にあるマンホールの蓋)

<ラッサール神父の思い出>

1982年11月3日の宣教再開百周年記念祭に先立ち、10月17日にシュワイツェル神父の記念講演会がありました。ここで、幟町教会報「平和の鐘」102号に掲載された講演会の記録を紹介しします。

今年は、この広島土地に、二百五十年の迫害のあとで布教が再開されて百年になります。百年の歴史と伝統があるということになるのでしょうか。ただ私達はこの教会が百年の歴史を持つという事を決してゆっくり坐って喜ぶだけでなく、そのことが私達にとって新しい世紀へと飛躍するための踏み台にならなければならないと思います。

それと同時に私達の先輩のしてくれたことは励みでもあります。非常に重い意味をもったものとして、責任をもって引き受けて行かなければならないと思います。

私は、昭和十三年に広島に来ました。それから間もなく当時のメスネル主任司祭に手伝ってほしいと言われ、たびたび幟町教会に呼ばれて、まだ日本語もろくに知らないまま、侍者として祭壇のまわりに立っていたものでした。

当時の教会は敷地全体で六百坪しかなく、今、説教台のあるあたりに百五十平方メートルほどの平屋があって、それが教会と幼稚園を兼ねていました。

信者の数も勿論少なく、ある意味で、カタコンブ



(工事監理するシュワイツェル神父) 風呂井氏提供

の時代でした。信者として教会に通うことは勇気のいることでした。なぜなら、当時は、教会に通うことは、警察、憲兵隊の目をひき、あやしまれることでした。それを恐れないで教会に通うこと。ミサにあずかることは、よほどの犠牲をはらう決心が必要だったに違いありません。又、実際に犠牲になった例も沢山あります。(略)

そして、この百年の中心的な出来事、それは原爆です。私は、強制疎開で田舎に送られて、八月の末に又広島に戻って来ました。こゝには、何一つ残っているものはありませんでした。

司祭館も、基礎だけ残して、あとは屋根瓦しか残っていませんでした。当時、私達はまだ若い神学生だったものですから、管区長のラッサール神父の処へ「どうしましょうか」と聞きました。するとラッサール神父は即座に「勿論、又、やります」と答えました。その返事はラッサール神父にとっては当然の答えであるかのようにでした。それから、まず第一にここでしたことは、廢墟を片付けることでした。

私達は毎週、二、三回ここで汗を流しましたが、日曜日には、だんだん生き残った信者も集まって来て、外に祭壇を置いて、ミサを捧げたものでした。

その様にしてやっと終戦後四ヶ月目に、最初の小屋ができて、その年の十二月六日の夜、私は初めてここ幟町に泊った覚えがあります。

この小屋は、二間に一間、二坪ほどでしたが、まもなくそれは最初の神父館でもあり、又お聖堂にもなりました。戦後の最初のクリスマスは、その中で夜中のミサも捧げられたということになります。

翌年になると、被爆した家族にプレハブの家が配給されることになり、三軒分の家をもらって、その一つを神父館、残りの二つを合せて小さいお聖堂と幼稚園に使いました。

その後、神父館が建てかえられ、次に音楽学校のサビエル会館 - 昔の仮聖堂 - が出来ました。

しかし、私達が考えたことは何よりも本当のお聖堂がほしい、あれにもこれにも使うという場所ではなく、本当に「神の家」というべき一つの聖堂がほしいということでした。

私達は出来る限り早くと望み、いろいろな設計案が出ましたが、ラッサール神父様の答えは決まって

「だめです。」でした。ラッサール神父様のヴィジョンは壮大で、最初の原子爆弾が落ちたここ広島には、大きな平和記念聖堂を建てたいと主張され、その点に関しては実に頑固でした。本当を言えば私達はその考えにあまり賛成ではなく、何年か先に立派なものをつくり、今、小さくてもいいからとにかく早く本当の聖堂がほしいという気持ちでした。しかし、今ふり返ってみますと、ラッサール神父様はやはり正しかったと思います。

原爆の落された日は、主イエズス・キリストの山の上のご変容の日でしたが、この聖堂のモザイク壁画は、そのキリストではありません。昇天なさるキリストでもありません。このキリストは来臨のキリスト、この世の歴史が終わる時再び現れて全世界を裁き、全世界を完成するキリストです。ここには深い意味があります。私達原爆を経験したものは、人間の悪意と無責任がどれほど大きな苦しみを他の人間の上にもたらすかということを経験しました。この事によって、もう歴史に失望したという人がいるかもしれません。

しかし、私達はキリストを信じる者として希望に生きる人間です。私達の信仰が示す通り、歴史の終り、歴史の最終的な目的は失望にあるものではありません。いくら悪魔が、どれほど人間を苦しめても殺しても、歴史はこれで終るわけではありません。

我が主イエズス・キリストは、罪と死に打ち勝って勝利を得られた、この我が主キリストは終りの日に又来臨され、私達がキリストと結ばれているかぎり私達もその勝利にあずかることが出来る。このモザイクが私達に教えるのは、実にそのことなのです。

もう少し当時の教会についてお話しすると、新し



(整地作業に汗を流すラッサール神父たち)

い教会の建設のために外人もたくさんいて、そういう私達がスコップを持って土方をしていますと、面白がってたくさん見に来る人がいました。私達はそういう人達と休憩の間、話しあいました。その人たちが見たものは、当時、広島その他のどの場所にもあったような失望がそこには無い、新しい目標を持って再出発のために働いている人間でした。人々はそのことに感動していたようでした。作業をする人間は、次第にふえ、それらの人達が一緒になって汗を流し、この教会が再建されたわけです。

新しい出発の後、戦後の信者の方が布教に活発であったことは、特にお話ししておきたい嬉しいことです。何とかして他の人たちにもよい訪れ、福音をつげようと、職場、近所の人などを一人でも多く教会と接触させるよう努力しました。

教会まで何とか案内するか、或いはよそまで出かけてあちらこちらで講演会、文化講演会を開く、田舎の方まで車で一緒に行き、夜中に帰って来る。勿論、次の日は出勤しなければならないのですが、布教のため、キリストのためであればその犠牲も惜しみませんでした。勿論、時代が違っていたと言えるかもしれませんが。当時は今のようにテレビその他の娯楽があるわけではなく、何の楽しみも無い時代でしたから、講演会などにも人が集まりやすかった、布教がし易かったと言えるかもしれません。しかし、考えなければならない事は、時代はちがいますが事情は変わっても、あの当時の幟町の大きな精神を失ってはならないという事です。今、この時代において、どうすればキリストまで導けるか、それをあの当時の精神に立ちかえて真剣に考えなければなりません。

それからもう一つ、こゝは祈りの教会でもありました。こゝに地下聖堂を、ラッサール神父様が作らせた目的は、こゝで昼夜年中ご聖体の礼拝をする予定だったためです。数人のシスターもそのために見えましたが、いろいろな事情で帰らなければなりませんでした。

ラッサール神父様の望んでおられたように、昼夜は無理だったかもしれませんが教会の側を通る時、或いはミサの後の会合の後、帰る前にもう一度、聖体を訪問して、私達のために苦しみを受けられ、隠れておられるイエズス様を訪問する事もその当時の

信者の習慣でした。塔に刻まれている言葉を見ますと、この聖堂は原爆でなくなった死者の霊を慰さめ世界平和を祈る聖堂であると記されています。それをどう実現して行くか、それは何々反対のデモでもありません。勿論、場合によってはそれも必要でしょう。抗議文を出すことも必要でしょう。

しかし、何よりもこゝに記されている通り、まず第一に神と人間の間の平和が出发点であり、前提であることに間違いはありません。

これがなければ、いくら政治家が努力しようと、いくら条約を結んでも、それで平和を期待することは出来ません。私達人間が、キリストに於て本当の平和、神と人間との和睦を発見するように、出来るだけ多くの人をキリストまで導こうと努力する事こそ何よりも大切な事です。そうすれば、ラッサール神父様が、望んでおられたように、こゝが本当に祈りの場になって私達みんながこゝで神に祈れば、神だけが世界に平和を与えられるに違いありません。

神ご自身が人間の心を理解され私達人類全体が叫んでいる平和がもたらされるよう、もっと熱心に祈りましょう。(完)

(紙幅の関係で編者が一部変更しています。)



(制作中のモザイク壁画の前での結婚式)

世界平和記念聖堂献堂50周年 を迎える祈り

【今月の祈り】

12月の意向

「ドイツは戦争で酷い破壊を受けたが、平和のために日本国民と一緒に働く」

(第三の鐘の銘)

「殉教者の血は、キリスト信者の種、平和の種」

(第四の鐘の銘)

世界平和記念聖堂の鐘塔にはドイツから贈られた四つの鐘があり、今月の意向は、その第三の鐘と第四の鐘に刻まれている言葉です。これら四つの鐘のすべてに「平和」という文字が刻まれています。第三の鐘にはドイツの使徒、聖ペトロ・カニジオの名と共に、平和のために日本国民と一緒に働くという言葉になっています。第四の鐘には日本初の殉教者である聖パウロ三木の名と共に、殉教者の血は平和の種と記されています。

ドイツも日本と同じく戦争により一切を失ってしまったけれど、平和を思い、考え、平和の大切さを知り、世界に平和を築くため、日本と共に働いて行くことを願っているのです。

戦争の犠牲者となった世界中すべての人々の魂の叫び、特に広島・長崎で原子爆弾の最初の犠牲者となった殉教者の尊い血を、我々の願いの「力」「平和の種」として、今こそ、聖ペトロ・カニジオ、聖パウロ三木の取次ぎを通して世界平和を願い求めます。戦争、エネルギーなどすべてのものには限りがありますが、平和こそ限りの無いものです。私たちはキリストにしたがって生きる者として、祈りと行動をもって世界恒久平和のためにこの鐘を鳴らしつづけてみましょう。



(聖書の言葉)

平和を実現する人々は、幸いである。

その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである。

天の国はその人たちのものである。

私のためにののしられ、迫害され、身に覚えの無いことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。

(マタイ5章9~12)

(黙想)

(祈り)

父であるわたしたちの神よ、

今、ここに世界平和記念聖堂献堂50周年を迎え心から感謝し祈ります。「戦争の道具だった鉄鋼」は今、世界平和記念聖堂の塔の4つの鐘として、み国の平和を人々に響き渡らせています。

この鐘のひびきによって「真の愛と平和」に私たちが導かれ、世界で最初に原子爆弾の犠牲者となった広島市民として世界の人々と心をひとつにすることができるよう。そして平和の実現のために共に働いてくださる方に力づけられ、さらに義のために迫害された殉教者に勇気づけられて、「永遠の世界平和」の実現のために働く事が出来ますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

「今月の祈り」は、三篠教会が担当しました。



(塔に吊り上げられる平和の鐘)

編集後記

献堂50周年を閉じるにあたり

献堂50周年実行委員会

委員長 深堀升治 神父

“こころを一つに平和を宣べ伝えよう”のモットーを心に、この記念すべき年を過ごし、早くも大晦日をもって終了を迎えようとしています。

一発の原子爆弾は、世界で初めての惨劇を人類にもたらし、大きな犠牲を払うことになりました。

神は、「悪からさえも善をひきだすことができる。」と教えられたように、広島のに、虚偽ではなく真実、権力ではなく正義、憎悪ではなく慈愛であり、これが人類に平和をもたらす神への道を発芽させる為に聖堂が献堂されました。世界各地の平和を願う人々の結実として50年間、絶えることなく祈りが捧げられています。その美姿は市内どこからも見つめられ、平和の鐘の音は遠く祇園までも届いていました。献堂以来の平和への希求の波紋は、ラッサール神父の一石からはじまり、広島司教区の信徒、市民、世界の人々へと拡大されています。時が経ち12使徒の後継者である司教が着座する聖堂と定められ、「カテドラル」とも呼ばれる重要な場となりました。

8月5日教皇大使、全国からの司教、信徒、諸外国からの巡礼者と共にミサ聖祭が捧げられ、主の食卓に於ける一致の内に、平和祈願、戦争犠牲者の慰霊及び50周年記念の感謝の祈りが捧げられました。このもっとも大切な祈りを中心に、各地区からの巡礼団による祈り、平和コンサート、邦楽奉納、講演会、学習会、祈りの集い等が実施されてきました。この50周年を契機に、世界平和記念聖堂が「人を平和の働き人へと変える聖なる祈りの場」、「人を人として正気へと導き、慈愛の人へと変える修練の場」として多くの人々に愛され、親しまれるようになりますように心から望んでいます。

広島教区の信徒の皆様一言申し上げます。この世界的に平和を呼びかける聖堂として献堂された「カテドラル」を心の中の母教会と自覚して、是非一度は平和の巡礼を個人として、各小教区として実行に移してください。「広島司教区の信仰のシンボルがここにある。」ことを自分自身のみならず各家庭の

信仰の後継者にも伝えてくださいますように。親として、子にこの大聖堂を指さしながらキリストを信じ、平和の使徒として生きる為に、献堂されたこの「カテドラル」が私達の母なる教会のシンボルである事を伝承して下さいように。

広島教区の世界平和記念聖堂の存続は、人類が最も優れた知と情と意を最も愚かに使った原子爆弾の惨劇の証拠であると同時に、「神は悪からさえも、善をひきだすことが、おできになる。」と信じていることのできる人々によって、人類の愛と平和への再起をよびさます力が与えられている証拠であります。人は、神様の力に支えられたら、立ち直ることができる存在なのだと気づくものです。

私達は、50周年を契機に真実、正義、慈愛と平和にもっともっと渴く人でありたいものです。

平和への願い

献堂50周年実行委員会

副委員長 斉藤真仁 神父

わたしは、神学生時代から鳩のフンでいっぱいの塔の掃除、雨もりの補修などずっと世界平和記念聖堂に関わりがあった。そのおかげで聖堂の構造を良く知ることができた。さらに献堂に尽力されたラッサール神父様はじめ工事に関係した方々の話を聞くにしたがって、この建物に込められた思いがどんなに深いものであったかということも知ることができた。世界平和記念聖堂のことを知れば知るほど、当時の人々の平和の願いがしのばれる。ラッサール神父様のこの聖堂建立の願いが広く理解されたことがうなずける。今年、献堂50周年でその意義を問いかえし、新たな平和への決意を持つことができたのではないと思われる。ついこの間まで聖堂の寄贈品や碑文に目をとめることもなかった人もあったと思う。それらの碑文や寄贈品が訴えている平和の願いがわたしたちの心にきざまれたことだろう。この聖堂もやがてこわさねばならない時がくるであろうが、この聖堂建立の意義は、伝え続けることができる。そうすれば広島教区の使命を徹底しようという一致した行動も伝承されると思う。

東西霊性の掛け橋、ラッサール師を思う

霊性・典礼部会 イエズス会司祭 柳田敏洋

世界平和記念聖堂の献堂50周年という年にあたり、霊性典礼部会の一員として過ごさせていただいた。おもに50周年の記念ミサをどのように祝うかに精力を費やしたが、改めてラッサール師というイエズス会の先輩会員を思い起こし、その一つとして師の書かれた『禅、悟りへの道』を読む機会があった。そこに、原爆を体験し世界への平和を願うシンボルとして平和記念聖堂を建立しようされた思いの奥に、心における平和の樹立こそが要であると同え、福音を現代世界に広めて行くこと、またその生き方を通して証ししてゆくことの大切さを感じた。

師は当初、禅を日本民族をよりよく理解するための手立てと考えて戦時中に座禅を始められた。けれども、戦後本格的に小浜、発心寺の原田祖岳師の下で参禅するようになってから、むしろ自分自身の宗教生活に役立つことを見出し、禅が「現代生活のあらゆる不安にもかかわらず、深い内的平安に達することのできる一つの道」であることを確信された。集中座禅である接心の中で深い霊的境地に達し「神秘体験においてわれわれは今や直接に、これまで信仰を通じて間接にしか知らなかったものを体験する」と述べておられ、禅体験がキリスト教信仰を深めるために役立ったことが分かる。

師はその後キリスト者として禅を広める世界的な活動をしてゆかれ、東西霊性の掛け橋としての先駆的役割を果たされた。現代、問題の渦巻く世界にどのように平和を築いてゆくべきか私たちは大きな課題を背負っているが、ラッサール師が一つの示唆を与えてくれているように感じる。今後も続けて、師の内的歩みをふり返って学びたいと考えている。

編集後記に代えて

霊性・典礼部会 青葉憲明(幟町教会信徒)

献堂ニュースは、世界平和記念聖堂の献堂50周年を記念して発行して参りました。今年の2月から始めたニュースの発行は一応これで終わります。

50周年行事のテーマに「ラッサール神父の献堂の精神を学ぶ。」があります。しかし、何から学んで

ゆくのか、聖堂記のほかに手がかりがありません。これでは、学ぼうとしても無理です。聖堂建設の経緯やラッサール神父の意向を皆さんと共に学びたいというのが発行の動機でした。献堂50周年に役立ててくださいという善意の「写真や資料の提供」に後押しされて、1ヶ月遅れの発行となりました。

聖堂建設の経緯については、広島国際大学の石丸先生が著された「広島における村野藤吾の建築 - 世界平和記念聖堂」(相模書房)があります。しかし、カトリック教会の立場で、特に、霊的な面での献堂の歴史をこの期にまとめる必要を強く感じました。当時の資料の保存、整理が不十分で、十分な情報提供が出来なかったことに忸怩たる思いでいます。これら資料の体系的な整理と、ラッサール神父の伝記や師とともに活動された人々の話なども記録にとどめ、カトリック教会の青史を残すことが必要です。

私たちは、どうしても形あるものに目や心が向かいがちですが、ラッサール神父の精神に少しでも近づいて行きたい。そして、世界平和記念聖堂がここにあるということ、私たちの聖堂とは何かを改めて考えることの出来た一年でもありました。

「恵みの賜は、罪とは比較になりません。」というパウロの言葉にあるように「祈り」に出会う恵みをいただくことができました。発行当初は、いつまで続くものやらと心配する声も耳にしましたが、独善的にならないよう配慮しながらも、「恐れるな、あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」という言葉に支えられ、その役割を果たすことが出来ました。神に感謝!

献堂50周年ニュース

vol.01 12月号(No.11)

2004.12.01 発行

(編集・発行)

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会
常任委員会

〒730-0016 広島市中区幟町4番42号

Tel 082-221-6017

ホームページ <http://www.hiroshima.catholic.jp/>